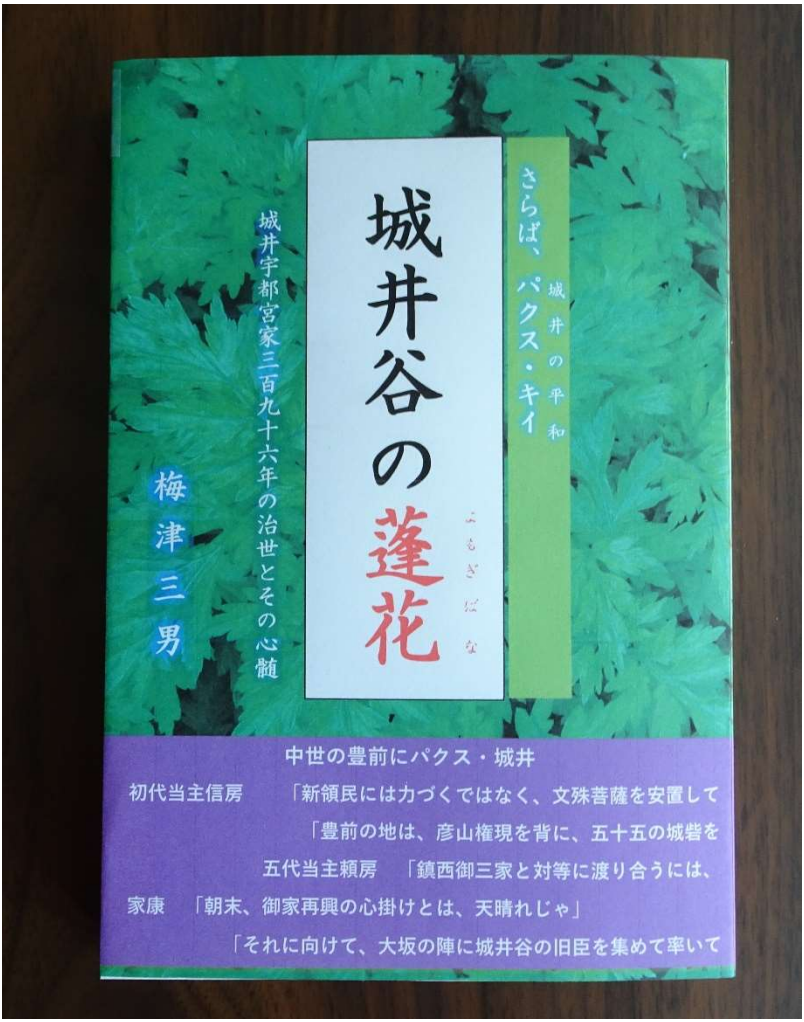

さらば、城井の平和
パクス・キイ
城井谷の蓬花
ふもざばな
城井宇都宮家三百九十六年の治世とその心髄
梅津三男
中世の豊前にパクス・城井
初代当主信房　「新領民には力づくではなく、文殊菩薩を安置して
「豊前の地は、彦山権現を背に、五十五の城砦を
五代当主頼房　「鎮西御三家と対等に渡り合うには、
家康　「朝末、御家再興の心掛けとは、天晴れじゃ」
「それに向けて、大坂の陣に城井谷の旧臣を集めて率いて

立ち読み　『城井谷の蓬花』　注：本書四六判をA5判に変換しています。

もくじ

はじめに
序
城井谷の蓬花
『城井谷の蓬花』の関係略図・城井谷
蓬生
哀悼
盆踊の口説き
母との離別　30
贐
宝珠山へ庇護を求めて
遺諸
天下人との出会い
信房の事績
爪牙の臣
立志

出仕
京土産
信房の夢　国創り
国の姿
陣法　縦深の護り
絵図
野峠越え
南の親骨
八つの仲骨
縦深の護りを説く
夢の継承
出家
頼房の決断
万機到来
秘計
叡智
頼房の悲願成就
公景の凱旋
高房の厚情

擾乱の始まり
翻弄と凋落
秀吉の力
長房の無念
悲願　御家再興
さらば城井谷

資料１　参考文献・資料
資料２　下野宇都宮家・城井宇都宮家の系譜と歴代当主
資料３　宇都宮家嫡流・庶流の各家名の語釈
資料４　城井谷の諸城名の語釈
資料５　鎌倉時代の豊前国交通路

蓬生（よもぎう）

『確かに鉾立峠からの道は沢の流れの前で途切れ、見失った道の謎解きで立ち往生させられたが、対岸から見れば川下手奥に寒田村へ下る道がはっきりと見える。このような隠蔽も家臣の指導か、村人たちの護りの知恵の一つで狼狽工作をしたのであろうか』

『寒田村への道を消すための蓬生か』

『これだっ。私は艾蓬（がいほう）の射法の家伝を知る由もなかったが、これこそが、代々が領民に残した艾蓬の射法ではなかろうか』

蓬生は緑を湛（たた）えてはいたが、その中に紛れた茶褐色の古い茎の先端は鋭利な切り口で、根元から二、三寸程の高さに切り揃えられていた。

『危うく足を草鞋ごと踏み抜くところであった』

盆踊の口説き

―　城井落城物語（前編）　―

さんさこれから私が音頭

（合言葉）サノヨーイ　ヨヤサノサー

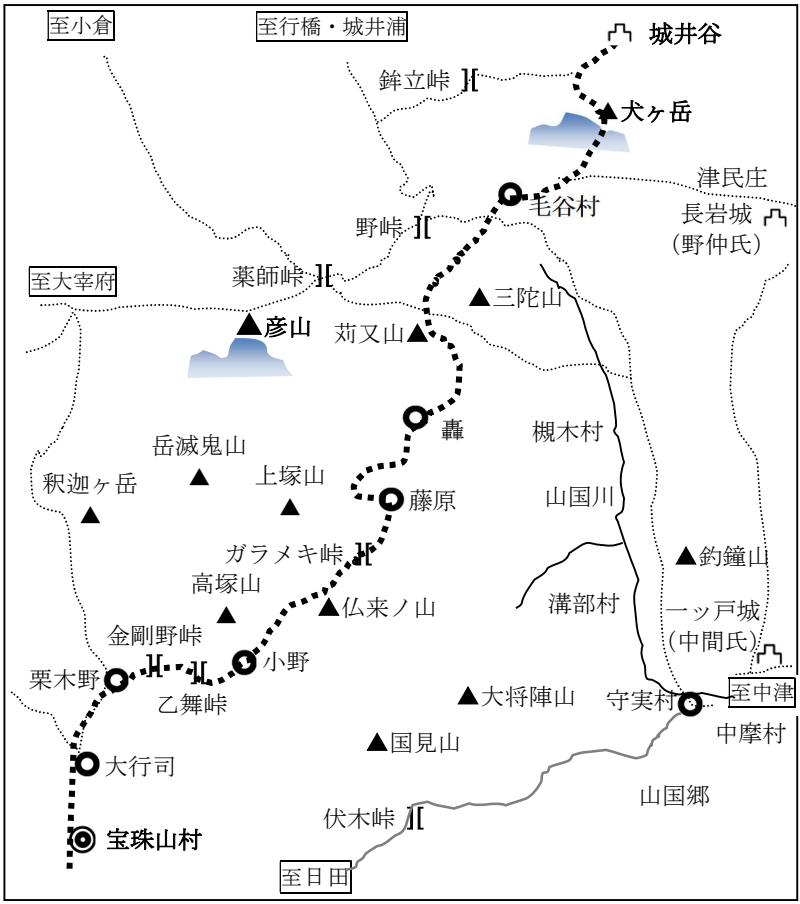
国は豊前の築城の郡（ごーり）

名所古蹟でその名も高き

城井の城主鎮房公の
　遠き祖先は関東にありて
弓で名高き名家でござる
　弓で占う射法の儀とて
他家に出来ない奥儀を極め
　その名普く津々浦々に

母との離別

『母上、御家再興は一時も忘れたことがありませんが、わたくしから一つお尋ねしたい事があります。お許しいただけますか』
『他人でなくあなた自身が疑問に思った事ならばいいですよ』
　末房はたじろぎながら口にした。
『わたくしは母上のお供をしての城井家再興は叶いませぬか』
『それはなりませぬ。相良家はそれを望んではいませんので迷惑を掛けることになります。城井家再興は城井家の中の範疇でやり遂げることです』
　と、龍子はきっぱりと言い切った。



宇都宮朝末（幼名末房）の母龍子の避難経路
（城井谷から宝珠山村）

天下人との出会い

『はっ、はー。城井朝房の嫡男末房と申します』

『わしは、九州征伐には出征しておらず様子はよく判んが、そちの母方の秋月家は最後まで抵抗したと聞いておるし、城井家は秀吉より当初領土を安堵すると聞かされ、秀吉軍に従ったそうだが、最後の最後には黒田勘兵衛のもとに居ながら秀吉から伊予への転封を申し渡され、これに鎮房殿をはじめ、城井の領民は必死に抵抗し遂に攻める側は音を上げたそうだな。

その後の和睦の話の後の悲惨な話も耳にしておる。この家康、秋月にしろ、城井にしろ四百年近くにわたり領民とともに土地を護って来たことに敬服に値すると考えて居る。この世の先はわからぬが大いに故人に学びたいものよ』

『大変なお褒めのお言葉に恐悦至極でございます』

『ところで、これからのことじゃ。忠昌から聞いておるが、独り身ながらお家再興の心掛けとは天晴れじゃ。わしにできることは二つ。一つは、どうじゃ。

名は末房といったな。それなりの意味があり命の名を授けられているが、今後のそちの世の朝を迎えられ、末永く多くの同志が得られるように忠昌への仕官を機会に、朝末（ともすえ）と名を改めたらどうかな』

『そうか、そうするがよい。もう一つだが、この世はもうひと山波乱がありそうだ。大坂では関ヶ原合戦の残党どもが不穏な動きをしておる。それを鎮圧することになろうが、その時に城井谷の旧臣を集めて参陣すれば、関東に所領を与えよう。どうじゃ』

『ところで朝末、宇都宮家には伝来の弓の技法があるそうじゃが、身内が母一人ではその話は聞いておらぬだろうのう』
『艾蓬(がいほう)の射法のことでしょうか。城井家十七代長房、十八代鎮房、十九代朝房を一度に失くしましたので、そこでその秘法の伝承は潰(つい)えてしまいました』
『うむ、そうか。惜しい事をしたなあ。まあ、これからそちが一から創りだせばよい。それも苦しくも有り楽しいものよ。では、大坂でそちの勇姿を楽しみにしておるぞ』

出仕(しゅっし)

「わしはのう、決めたんじゃ」
「と、いいますと」
「自分の立つ足場が決まると良い考えが自然に湧いてくるもので、宇都宮で参拝中にお告げをいただいて参った。一つは仲津郡城井浦に新たな本拠とした神楽城の築城を記念として、大明神を同地に勧請(かんじょう)し、伝法寺庄には文殊菩薩を勧進することにした」
「大明神は開祖宗円公を祀ってありますので判りますが、文殊菩薩をどうして伝法寺庄へ安置なさるのですか」
「お主の力づくでの治政では分かるまい。お主のような者に拝ませたい菩薩様だ。下野の本家の元来の家訓が説法であったように、文殊菩薩は仏の教えを説き智恵を司る仏様であり、領民

には、旧領主と新たな領主の利の度合いを天秤に掛けさせたり、手なずけたりするなどの誘引するようなことは避けて、領民が自主的に会得し収得してもらおうと思って決めた事じゃ」

信房の夢　国創り（くにつくり）

信房は、右手に握った扇子を一同の前にかざした。

「これが何であるか言うまでもない、扇子じゃ。わしが今から話す事は扇子の形をした物語じゃ。これが全てを語っておる」

「重房、何が見える」

「殿、殿の心は透けては観えませんが、見方によっては扇の面が広くも狭くも、山谷が高くも低くも見えまする。それがしに見えるものはそれが全てでございます」

「まあ、そんなところだろうなあ。ハッツハッツハ」

「ほれ、先ほど山谷が見えると申したな」

「両端の親骨が内側に畳むほどに領地は狭まり、山谷は深くなり領民は追われ作地を失い、日当りの悪い額ほどの作地で生きるに困窮してしまう。言い換えれば要は如何に親骨の両翼を広げ、領民には困苦を強いることのないような治世を行うかにある。如何でしょうか、殿・・・」

国の姿

「こうしてわしらの根城が出来た目出度い席ではあるが、これから先を見据えた時、大事なる事は本拠を護ることでは無く、本拠を踏み台にして如何に所領を領民のために拡げるかにある。今の国の姿は扇面を半開きした程度のこと。これからは親骨を如何に外に向かって限りなく広げ、そこに国の姿を見出したい。それには扇の緘尻（とじり）が何処で、扇面がどの方角に向いているかが重要な事だ。これからの宇都宮家の本拠は、扇の緘尻を彦山権現とし、背にした彦山六峰の峰々、その修験者の後押しを得て、民の豊かさを求めて扇の要をこの神楽城から新たな本拠に移すぐらいの気概が必要である。先ずは新しい国の姿の骨格を皆に示めそう」

陣法　縦深（じゅうしん）の護り

――仲骨の地域は当家を支える屋台骨である。

彦山、犬ヶ岳、求菩提山から周防灘に伸びた扇の仲骨に当る峰々に城砦を築くが地勢の特徴を生かして縦深の配置とする。この縦深の配置とは、尾根を曲輪（くるわ）とし、谷戸先から谷奥に向かって尾根筋に城砦を順次配置することで、敵が谷にいても尾根筋にいても常に眼下に迎え撃つことが出来る有利な戦法となる。いわば敵の動勢を俯瞰的に捉え有利に戦局を導くことができる。ここで肝要な事は、その前線の情報を本拠と如何に速やかに結び伝えるかにある。わしは

天には登れぬが、山々の稜線を縦横に走る連絡網を天から見下ろせるとすれば、それは将に、天空路の景観であろうな。

密教の世界に七里結界という言葉があるが、正道なる教えを妨げないように魔障を七里四方に設けてあるそうだ。彦山霊仙寺の寺領は七里四方というが、七里結界の意味と重なる。

ここはいわば不可侵の聖域じゃ。そして、もう一つ大事な事は修験者の修行の場である霊山の方角と位置を心得え、祭事の祀りごとには献納し支えて行かねばなるまい。

野峠（のとうげ）越え

「旦那様、ここが毛谷村の入口となります」

「そうか、単なる山道のように思えるが確かか」

「ほら山道の両脇の茅が踏み倒され、こちらの方に向いているでしょう。土地の者は茅を踏み倒しは致しません。これは彦山への参詣者が通った証でございます」

「どうして、そう言いきれるのじゃ」

「茅は屋根葺きの貴重な材でございます。村人がそんな愚かな事をするとは思いません」

「そうじゃな。理に叶った話だ」

南の親骨（おやぼね）

重房の考えは、信房の思いをそのまま言い得ていた。信房は釘を刺された重房の心情も察し、場が落ち着いた頃合いを見て口を開き、大胆な策を明かした。

「幸いにも、これまで彦山や彦山六峰の寺社関係や修験者に機会あるごとに寄進や奉納をしてきたし、今後も続けて行かねばならないが、その甲斐あって求菩提山護国寺とも話がついた。

求菩提谷が開ける八屋（はちや）村の山内の辺りに末寺を建立することにした。当家の保護を担保するために、三男信政を出家させ座主として務めてもらうことにする。何よりも彦山権現があってできることだ。ゆくゆくは更に絆を太くして発展させて行かねばならんだろう」

出家

乱れた世にあって、信房に一抹の光明が射した。

俊芿が予定の十七日間の滞在を終えた所で、信房は申し出た。

「俊芿殿、初日のお話しで、確か寺院の新しい伽藍の中での参学体現の効用を説かれていたようにお受けいたしましたが」

「確かにそう申し上げました」

「成るほど、成るほど。俊芿殿、より多くの僧俗の面々が俊芿殿の戒律宗北宋律を体現できる寺を、このわたしに寄進させていただけないでしょうか」

「これは、これは唐突に。豊前の地に、でございますか」
「滅相もございません。若い頃の自分は下野国からの宮仕えや、大殿頼朝殿の命で随分と都に出入りする機会が多くあり、都の寺院の盛衰を随分と見て参りました。人間、強欲なもので、自分が出家してからは都の一角にでも佇(たたず)もうとしていた場所がありまして、そこを是非、俊芿殿にと思っておりますが・・・如何でしょうか」
「それは、それは勿体(もったい)ないお話しでございます」

頼房の決断

「そうです、頼房殿です。これを申し上げるのは憚(はばか)ることですが・・・、わたしは、城井宇都宮家代々の当主の中で頼房殿は名君主と思っているのですよ」
「それをこれから申し上げたく思います。きっと朝末殿の新たな支えになればと願っております。頼房殿の素晴らしさは卓越した外交力と傑出した決断力にあります。
確かに北条得宗家の一強多弱の専制体制への反発から、この北部九州でも反乱が起こり、中央では後醍醐天皇による倒幕の計画が発覚し、天皇の側近が随分と粛清されたことで、世間は幕府と朝廷とが攻め合う荒波に翻弄され、人々は疑心暗鬼に陥った政情不安定な状況でした。
その中で際立つのは頼房殿のとった勇往邁進(ゆうおうまいしん)な決断であります」
『一族の皆は信心深いと思っておるが、再来年は信房公の百回遠忌(おんき)をお迎えする。周りは時の

終焉を迎えたように騒々しいが、わが信房公が百三十四年前にお示しになった新しい国創りの夢は不滅で、周囲に惑わされる事もなく、それを代々に亘って承継し、皆が夢の実現に向かって邁進して参った。

その夢が実現の域にあるかは、唯一信房公のご判断を仰がねばならないが、わしなりに見て信房公に報告できるところまでに来たと思えるので、これを皆と共に遠忌法要の追善供養を以って報告したいと思う。

そこでじゃ。三つのことを申し上げたい。

一つ、信房公の百回遠忌を新たに建立する寺で盛大に法要を行う。

一つ、当家の本拠を神楽城から城井谷の本庄の地に移す。

以上二つの内、寺の建立を優先して、天徳四年（一三三二）には法要を執り行い、新たな城に入城を果したい』

頼房は豊房に視線を向け、息子の考えを計った。

『いま当家の当主に一番求められるのは、京と鎌倉に通じ、その筋から信頼を勝ち得ているかにある。それはこの豊前の島に留まっていては井の中の蛙、わからん。

とうとう後継ぎの話までしてしまったな。それじゃ腹蔵なく話そう。

豊房、お前は目出度く伊予守護となり、来年には伊予の当主貞宗殿の後継として伊予へと入国するが、これも先ほどの話の一端で久しく温めてきた構想でもあり、敢えて嫡男のお前を指名した。これから先は、当家が下野に成り代わって伊予を切り開き、下野は京、鎌倉、そして

東国を重点に力を注いで行くという事だ。この注力の分担は、自力を効率よく有効に行使することで、ひいては一族の連携を広域に補完し合うという事だ。

見よ、今や豊前と伊予を結ぶ連携が実現し、将来は更にその連携網を拡げ、大友や島津と肩を並べるまでにしたいのう、豊房』

万機到来（ばんきとうらい）

五月中旬を過ぎ、高氏からの書状が九州に寄せられた。

『その後、新田軍は鎌倉総攻撃を三方の切通しに向けて一気に仕掛けた。しかし、幕府の切通しの守備は堅固で突破は困難を極め、十八日交戦する中で洲崎の切通しで、十六代執権北条守時殿は自害し最後の執権となった。事実上鎌倉幕府は滅亡した。その夕刻、義貞は漸くにして引潮時に稲村ケ崎から鎌倉に侵入し幕府軍を殲滅（せんめつ）した。

伯耆国からの伝えでは、後醍醐天皇は二十二、三日には船上山を発ち御還幸の運びとなるようだ。この度は九州への催促は差し控え、本状が届く頃に、わしは九州の戦果を肴（さかな）にして西の夜空の月を眺めながら一献傾けているだろう』

秘計

京の頼房は老体に鞭打って精力的に動いた。

『尊氏殿、ご相談申し上げたき儀がございます。後醍醐天皇は光厳天皇の廃位を下され、上皇も御出家されると耳にしております。今後他の皇子方にも沙汰が及ぶと察します。これに執着する心つもりは一切ありませんが、後伏見上皇の第六皇子が出家され大津の園城寺の長吏(ちょうり)として務めておるそうで、出来ますれば、豊前彦山六峰の一つ求菩提山護国寺の末寺を手前どもで建立し庇護しておりますので、そこにお招きしたく尊氏殿のお許しをいただきたくお願い致す次第でございます』

『そのものは何と申すか』

『長助法親王(ちょうじょほう)と申し、十歳になったばかりと聞いております』

『十歳で社務を取り仕切る長吏とはな。頼房殿はそのものに何か特別の厚情をお寄せか』

『御存知のように、園城寺は延暦寺と対立する中、焼き払われ、百二十年前に鎌倉の政子殿の命で、大内殿、佐々木殿、そして当家にとりましては本家である下野宇都宮家の頼綱らにより再建された経緯があり、ひとしおに縁を感じております。仏門にあるとはいえ、この世に命を授かった若者の信心の道を支える事ができれば幸せでございます』

『そうか、上皇にその話を取次げばよいのじゃな』

いよいよ信房が描いた彦山権現との一体の国創りが実現する第一歩をしるした。

叡智（えいち）

住職は当主としての心得を朝末に示した。

「日の本を統治するには、それ相応の器量が必要と云う事です。後醍醐天皇には叡智が備わっていました。

朝末殿、後醍醐天皇の倒幕への諦めない強い意志と、それが成就した先の統治に対する長期的な視野での戦略的な考えを、御家再興に向けて是非身に付けて下され。これからのお話しの中に、朝末殿にとって資するに値する後醍醐天皇の叡智にお触れになると思います。

頼房の悲願成就

尊氏が赤間関に到着するという予定日の二日前に高房は頼房の前に現れた。

『高房、きょうは甲冑（かっちゅう）姿で余所（よそ）行きの緊張した面持ちだが、どうした』

『殿、高房は決断致しました。熟慮のうえ、尊氏殿に味方致しまする』

『そうか、そうか、よく決断なさった。九州の果てで相談する相手も無く、よく決断なさった。その訳は聞くまい。そしてこれからどうするのじゃ』

『尊氏殿は明日には赤間関にお着きになると聞いております。少弐殿は一足先に門司関に向っており、わたしの手下も同行しています。わたしはこれから企救へと向かい少弐殿と共に尊氏殿の出迎えの準備に就きます。そこで、殿。一つお願いがございます。』

『なんだ』
『尊氏殿の再興に殿のお力添えをいただきとう御座います』
『尊氏殿の方に味方せよというのじゃな』
『その通りでございます。赤間関で尊氏殿にお迎えの席で、宇都宮頼房殿も再興に一役買って出たい、と申し出をしとうございます』
『高房、そんなに婉曲(えんきょく)なものいいをするな。高房の名で頼房を説得し城井宇都宮家一族をあげて尊氏殿にお味方いたします・・・といいたいのじゃな』

高房の厚情

親王の側近五条頼元が訝(いぶか)しげに訊いた。
『陽動とはいうものの、豊前と云えば宇都宮一族の地元。景泰殿御自身が尊氏方に取り込まれやしないか。また、肥後の山中の菊池に確実に着く手立てはあるのか。もう一つ、親王の肥後国入りを受け入れる具体的な策は持ち合わせているのか、聞かせ下され』
『城井宇都宮家の先代頼房は他界し、現在は下野の高房が後を執っております。当家の豊房は頼房の長子で、高房の城井への入嗣は、頼房とこの景泰の絆あってこそ成就したものであります。その信頼は高房に引き継がれており、景泰率いる別働隊の動きには寛容な計らいを確信しております。このことは菊池に至る担保を取り付けたと同然であります。
次に、親王の肥後国入りですが、薩摩と肥後の間には島津が立ちはだかっており、海路が一

番無難でございましょう。勿論、肥後入りの前提は菊池、阿蘇両氏の支援が確保されていることであり、想定される上陸地点と両氏本拠の相対的位置からすれば、南に拠点を持つ阿蘇氏の上陸支援は絶対に必要となるでしょう。

阿蘇氏の水軍力の量、質も未知数であり、現地で確と見分しご報告を申し上げます』

『景泰殿、そこまで御考えとは恐れ入りました。貴案は後で親王に申し上げておく。以後宜しく頼むぞ』

秀吉の力

長房は自問自答した。

『秀吉が小倉に陣し島津征伐への出陣要請に対する評定の際に、中間統胤からの信書で「平生の誼(よしみ)をたちて黒田に従うべし」との恭順の進言もあったが、源頼朝が開幕して以来、この地の守護としての四百年の治世とその誇りを、その時は断ち切ることは出来なかった。

だが待てよ、一方で統胤は宇都宮家との四百年の関係を見事に断ち切り遣って退けたじゃないか。ましてや統胤は、秀吉を赤間関で出迎えて豊前の情勢を進言したことが功を奏して、秀吉に召され、下毛郡山国郷中間庄の所領は三万石となり、城井家と肩を並べるいわば城井家の端城に過ぎぬ一ッ戸城にて天下の風を読み切るとは城主として立派な立ち振る舞い。

統胤は端城の城主として、大友や島津の矢面に立ち権謀の術を学んだのだろう。それ程に、城井家が護られていた事は間違いあるまい。当家は少し甘い世間の水を飲んでいたのかもしれ

ぬ。統胤の進言にもう少し耳を傾け、自らが赤間関で秀吉を出迎えていたら、豊前は安堵され、いやそれ以上に、領国は筑前、筑後まで及んでいたかもしれぬ』

長房の虚ろな視線は、縁側からは見通せないが自然と鎮房の向った求菩提山に注がれていた。

長房の無念

「大殿、大殿。一大事でござる」

鎮房が中津に向った翌日、四月二十日は鎮房の一行が戻ってくることになっていたが、その日の夕刻、早馬が溝口の館に飛び込んできた。

「詳しくは存じませんが、殿とお供の十人ばかりが合元寺を出て城に向かう際に、黒田の迎えの者と小競り合いとなり、その場は殿が鎮め、お供の残りの者は寺に留まりました。しかし、城内にお供した者の中で、難を逃れて来た者がいち早く寺に一大事を告げるや、あっという間に黒田の手勢が寺に押しかけ、両者は斬り合いとなりました。わたしは直ぐさま、空誉様の命で城井谷に走った訳でございます」

「それはよう伝えてくれた。ご苦労であった」

「早馬は、殿が前日に危急の際には使ってくれとご配慮いただいていたものでございます。わたしはこれで用が終わりましたので、お返し致します」

「そうであったか、鎮房がのう・・・。ところで、鶴姫の事は聞いてはおらぬか」

長房は覚悟した。そして、城井谷に残る過っての当主として最後の務めを果たそうとした。

『信房公が布陣させた「縦深の護り」は無比なるものとしてこれまで誇りとしてきたが、今やその血脈は断たれたか。しかし、その誇りは捨てまい。この護りが如何に戦略的に優れていたか、説明するまでもなく城井宇都宮家四百年の治世の歴史が証明している』

しばらく真一文字にしていた口から絞り出すように、

「これから皆が離れ離れになろうとも、魂はこの地に戻って来ようぞ」

悲願　御家再興

あの時に中津からの早馬の報に、八十歳を超え身の老体をおして長房公は城井家再興の手立てをしたと聞いております。一つに朝房公の室龍子様は長房公の深慮により難を逃れて彦山の南手にある宝珠山の地に身を隠したと伺っています。秋月から嫁いで間も無い龍子様は若殿を失くされましたが、これは普段からの彦山権現の信心のおかげでしょうか、朝房公の御子を身籠っており、その年に嫡男を授かりました」

「オオゥー」

驚愕（きょうがく）だった。参列者は驚愕し歓声をあげた。そして互い互いに顔を見合わせた。

朝末は続けた。

「どうか、城井家の再興、同時に皆様方の御家再興のためにも、そして領民のためにも、是非お力添えをお願いしたい」

朝末は、これまでに身に覚えのない位に深く頭を下げた。

すぐさま参列者から声が掛かった。
「お家再興の機会が訪れるとは夢じゃ、夢じゃ。ところでそのあかつきには、与えられる所領とは、この城井谷になりますかのう」
「ここは細川家の領地だ。家康公のお話しでは関東の地と云う事になっておる。それも家康公のお膝元であるし、城井家がそもそも下野国の出である事からの配慮であろう」
「この地ではござらんのか・・・」

さらば城井谷

住職は、その後の朝末が気になっていたが、永らく音沙汰が無かった。
だが天は城井家を見捨てなかった。行方知らずの朝末には男子がいて、下野の宇都宮家の縁者が面倒を見ているという。住職は朝末の夢が子々孫々に受継がれていくだろうと確信した。

顧みれば、今から二十五年程前に、城井宇都宮家の存亡の危機の最中に、長房は追手をまいて次郎坊峠に向かった。
そこには、蓬花と蓬葉の香りが漂い長房を見送っていただろう。そして、朝末もまた亡き父朝房の招きで次郎坊峠に向ったのかもしれぬ。
村人が見たと言う朝末の叫びだろうか。城井谷には木霊(こだま)と蓬花が鎮魂していた。
「さらば、城井谷よ」

「さらば、城井谷の蓬花よ」

――『城井谷の蓬花』は、あなたたちのことを忘れはしない――

著者のプロフィール

梅津　三男　（うめづ　みつお）
１９４７年　大分県中津市山国町生れ
２０１２年　「郷土の昔物語り」編纂・ＨＰ公開
２０１４年　『六助の義』自費出版

さらば、パクス・キイ　　城井の平和
城井谷の蓬花
城井宇都宮家三百九十六年の治世とその心髄

２０２０年６月　初版第一刷発行(Ver.1.0)

著者　梅津　三男
装丁　梅津　三男
発行者　梅津　三男
印刷・製本　共進印刷株式会社

定価　二、二〇〇円（税別）
ＩＳＢＮ　未登録